



船木誠勝(ふなき・まさかつ)
中学卒業後に新日本プロレス
に入門。欧州遠征を経てUWF
に移籍。その後、プロフェッ
ショナルレスリング藤原組を
経て、総合格闘技団体パン
クラスを旗揚げ。一度は引退
するも、7年半後に総合格
闘技のリングでカムバック。
その後、武藤敬司率いる全
日本プロレスで活躍。武藤
が立ちあげた新団体WRES
TLE-1に移籍するも、201
5年6月いっばいで退団し
た。現在はフリーのプロレス
ラー。

パンクラス創設者

船木誠勝

ヒクソン戦惨敗! そして即引退! 船木誠勝が15年の時を経て語る… 「我が人生に“恥”の一文字なし!

聞き手/安西伸一(元格闘技通信・編集次長)

新日本プロレスでスター候補と期待され、UWF 移籍を経て旗揚げされたパンクラスでは、24歳の若さで誰もが認めるエースとして活躍。常に日本マット界の最前線を走っていた船木誠勝だが、2000年5月、31歳の時にヒクソン・ 그레이シーに敗れると、その場で潔く引退を表明した。あれから15年。今一度、あのヒクソン戦を振り返りながら、船木が自身の「恥」とは何かを語る。

人間は死ぬ直前、個になり、「恥」も「名誉」もなくなるものだと思う。

——「恥」とは何か。今日は、波乱万丈の人生の中で多くの栄光と挫折を味わい、それでも独自の美学を感じさせる船木選手に、その答えをうかがいに来ました。

船木 そうですね、本当にそんな感じでまだ生きてますよね。プライドだけは絶対捨てたくないですから。だから今年、2年間所属していた団体から、自分の価値をガクンと落とされた契約にされそうになったので、フリーになりました。

——不景気な折、サラリーマンだったら、それを受け入れてでも会社に残る選択肢もありますけれどね。残りの選手生活を大切にされたかったですね。

船木 自分は15歳から、この世界ですから。試合数は減りましたが試合が続くこともあるし、正規の評価で試合をすればやりがいもある。この方が俺らしいな、と思います。

——では本題ですが、生きて来た中で「恥」を受け入れてしまったことはありますか？

船木 「恥」という「恥」はないんですけどね、本当は。自分の中では「恥」とか「名誉」とか関係なく、起こったことが全て自分の人生だと思って生きて来たので。でも対

世間っていうことになると、それが「恥」になっちゃうのかなっていう気がしますけどね。勝ちとか負けとかっていうことが「恥」とか「名誉」になるのであれば、それは世間が決めることだなと思うんですけどね。ただ自分の中では「恥」というものは、ほとんどないですよ。そういうつもりで生きてきましたから。

——プロレスラーとしてデビューした直後の16歳の頃から、週刊プロレスの記者として取材してきましたが、その通りだと思います。いいこと言うなあ、船木選手は。

船木 ただやっぱり世間が。例えばヒクソン・グレイシーに負けた時とか、世間の期待に反すると、結果が残念な事になって、後ろ指さされることになるわけじゃないですか。だけど、人間が死ぬ直前って、個になると思ってますよね。個になった時が、おそらく世間との関係が遮断される瞬間だと思うんですよ。そうだった時おそらく全く「恥」とか「名誉」とかなくなると思う。例えば亡くなる前、病気で苦しんでいる人達は、「恥」とか「名誉」とか関係なく、ただただ存在しているだけだと思うんですよ。だから「恥」とか「名誉」って、生きているうち限定のものなのかなと思いますけどね。死んだ後に、それが「恥」なのか「名誉」なのか決めるのも世間。残った人達なんだと思います。だから本人の中では満足というか、精一杯やっつての結果であれば、それは「恥」でもないし「名誉」で